

# ダルマキールティによる「諸行無常」の証明 —— Pramāṇaviniścaya におけるダルマキールティの第二回答 ——

酒 井 真 道

## 1. 本稿の目的

刹那滅論証を巡るインド仏教思想史上、Pramāṇaviniścaya (PVin) は重要な著作である。というのも、以降の思想史に強い影響を及ぼすことになる *sattvānumāna* (SA) と呼ばれる、刹那滅論証の論証形式が完全な形で姿を現すのが本作だからである<sup>1)</sup>。本作における刹那滅論証の叙述部 (PVin 276,11–83,10) はその 6 割強が、先立つ著作である<sup>2)</sup> Pramāṇavārttikasvavṛtti (PVSV) からの引用で構成される。残りの 3 割弱 (PVin 279,1–81,9) は PVin において新たに書き足された部分であるが、この増補部に SA は登場する。増補部の冒頭には、論証因「所作性」と所証属性「無常性」の遍充関係の不確定を指摘する前主張が置かれ、それに対する回答の中に SA が登場する。

蔵訳資料に基づく先行研究 (Steinkellner 1968/69, Steinkellner 1979) は、この増補部には、SA、そして SA の普遍妥当性を確保するための諸議論のみが収められていると理解している。いわば、増補部は SA 導入というただ一つの目的のために書き下ろされたと見なされているのである。しかし、PVin の梵文原典が出版され、更にダルモータラ註の梵文原典写本が参照可能となりつつある現在<sup>3)</sup>、この増補部について別の解釈が可能となっている。すなわち、ダルマキールティは、この増補部において、遍充関係不確定を指摘する前主張に対し、二つの回答を提示しているのである。第一は SA の導入の契機となるものであり、第二はそれとは別の仕方によるものである。蔵訳資料に基づかざるをえなかった先行研究ではその位置を正しく理解することが困難であったと思われるこの第二回答に焦点を当てて、その内容を考察するのが本稿の目的である。

## 2. 「所作性」と「無常性」の遍充関係の不確定を指摘する前主張

増補部の冒頭に来る前主張は以下のようなものである。

## (88) ダルマキールティによる「諸行無常」の証明（酒 井）

PVin 2 79,1-3: [前主張:]「一々の〔原因〕総体から生じたものは消滅する」というこのこともまた、全く確定されるべきではない。なぜならば、それら（＝一々の原因総体）を余すところなく見ることはないから。すなわち、諸〔原因〕総体は多様な能力をもつことが知られている。その中には不滅の本性をもつものを生ぜしめるような、或る何らか〔の原因総体〕が存在することもあるだろう。

この前主張では、不滅なものを生ぜしめる原因総体が存在する可能性が指摘されることで、一切の作られたものが無常であること、すなわち、所作性と無常性の遍充関係の不確定が主張されている。論拠は以下のようである。我々は、諸原因総体が様々な能力をもつことを知っている。例えば、米の種と土や水などの総体は米の芽を生ぜしめるが、麦の種の場合はそうでないというように。そして、我々はそういった原因総体の一々を余すところなく知覚し、その能力を一々確かめることができない。知覚には限りがあるから。よって、諸原因総体の中には、不滅な本性をもつものを生ぜしめる原因総体があるという可能性は否定できない——我々は単にそれを知覚していないだけだ——というのである。そういった可能性がある以上、遍充関係は成り立たない。

### 3. ダルマキールティの回答

#### 3.1. 第一回答

これに対するダルマキールティの第一回答は、実在物の目的実現能力に訴えるものである。

PVin 2 79,3-4: [第一回答:] [知覚されていない原因総体があるということは] ない。というのも、実在物というものは、目的実現の能力を特徴としているからである。すなわち、言表できない〔もの〕(*nirupākhyam*) というのは、それぞれ〔の目的実現〕に対する能力の記述 (*upākhyā*) の欠如 (*viraha*) を特徴としているのである。

この回答で核心となるのは、目的実現能力の記述 (*sāmarthyopākhyā*) という概念である。ダルマキールティによれば、或るものが言表されるのは、すなわち、或るものがことばによって言い表されるのは、それがもつ目的実現能力が根拠となってそう言表されるのである。この場合、知覚されていない原因総体があると主張しても、それは知覚されていないのであるから、それが如何なる目的実現能力をもつのかは知られえず、その能力は記述されえない。にもかかわらず、それは「原因総体」と言表されている。これは矛盾である。知覚されていない、すなわち、その目的実現能力が記述されえないものが「原因総体」と言表されることは

できない。このようにして前主張は斥けられる。「原因総体」と言表されるものである以上、その目的実現能力は知られていなければならないし、知覚されていないのならば、それはなにものとも言表されない、というわけである。

この第一回答を提示した直後に、ダルマキールティは、般涅槃時の阿羅漢の最後心をめぐる付論を展開する<sup>4)</sup>。そして、その付論を締めくくる形で彼は、非刹那滅なものは、阿羅漢の最後心がそうであるようには、目的実現能力をもつことができないことを結論づける。非刹那滅であるものは、目的実現の継時性と同時性との矛盾する。よって、非刹那滅なものは目的実現能力をもたず、従って非存在であると結論付ける<sup>5)</sup>のである。このような形で、存在性と刹那滅性の遍充関係が証明される刹那滅論証の論証形式が SA である。

第一回答では、SA で重要な役割を果たすことになる目的実現という概念が言及されてはいるが、第一回答の内容そのものと SA の提示は直接には関係していないことは注意すべきである。

### 3.2. 第二回答

この SA を提示した直後にダルマキールティは以下のように述べる。この部分が問題となる第二回答である。

PVin 2 80,10-12: [第二回答:] 或いは (vā), 蘊・界・処という特徴をもつ作られたものの無常性が論証されるのだから、批難に当たらない。なぜならば、それ (= 蘊・界・処) を性質としないものには、正しい認識が無いのだから、不成立なので、肯定的随伴を定めることが不可能だからである。そして、それこそが、我々にとって作られたものである。アビダルマにおいて [以下のように] 言われているように——「どのダルマが作られたものなのか。五蘊である。」と。

これをダルモータラは以下のように註釈している。

或いはむしろ (atha vā), それの本質が諸蘊であり、諸界であり、諸処であるもの、そのような作られたものの無常性が論証される。それゆえに、「このこともまた、確定されるべきではない。」と [先の前主張で] 述べられたこと、これは批難に当たらない<sup>6)</sup>。

すなわち、ダルモータラは PVin 2 中の選言詞 *vā* を *atha vā* と註釈しており、彼はこの箇所を先の前主張に対するダルマキールティの第二回答と見なしていることが分かる<sup>7)</sup>。

一方、蔵訳ではこの選言詞 *vā* に対応する語が *yañ na*<sup>8)</sup> となっている。これを受けて、先行研究は、*yañ na* を「更に／その上」(*ferner*) と訳出し<sup>9)</sup>、当該の部分、ダルマキールティが自らの新機軸である SA の普遍妥当性を仏教内部の論争から守る議論として理解している。具体的に言えば、SA は蘊・界・処という

## (90) ダルマキールティによる「諸行無常」の証明 (酒 井)

仏教の伝統的な存在論のカテゴリーによって分類されたもののすべてを包括できる論証である、ということが保証される一節としてこの部分が位置付けられているのである<sup>10)</sup>。

しかし、ダルモッタラの解釈に依拠すれば、ダルマキールティはPVinにおいて、遍充関係不確定を指摘する前主張に対し、2つの異なった回答を用意していることになる。そして、彼はこの2つの回答をそれぞれ提示するために、この増補部をPVinで新たに書き下ろし、PVSVからの引用部分に付加したことになる。

さて、第二回答は、作られたものとは、蘊・界・処を本性とするもののことであり、その無常性が論証されるから、前主張で述べられた過失はない、というものである。すなわち、前主張で問題となった知覚されていない原因総体を仮に認めたとしても、それから生じたものは、知覚されないものである。そして、それは、その知覚不可能性のゆえ、蘊・界・処を本性とするものにならない。そして、正しい認識がない、つまり直接知覚されることがないそれに対しては肯定的随伴を示すことができない。すなわち、遍充を示すにあたって、それを考慮すること自体、無意味なのである。

### 3.2.1. ダルマキールティによる「諸行無常」の証明——所作性と無常性の遍充関係の確定——

では、「作られたもの」、つまり、「知覚されるもの」、すなわち、「五蘊」の無常性はどのようにして論証されるのだろうか。五蘊の無常性が確立されれば、遍充関係は確定されることになるので、この証明こそが、遍充関係を確定するものとなる。

まずダルマキールティは、色蘊中の五つの感官の無常性を論証する。

PVin 2 80,12-14: その中で (= 五蘊の中で)、五つの感官はその本性が失われるもの (*svabhāvacūṭimat*) である。なぜならば、それ (= 五つの感官) の結果である認識作用には中断と変化とが経験されるからであり、そして、もし [それら五つの感官が] 同じ状態にあるとするならば、それらにはそれら (= 中断と変化) が不可能であるし、そして [同じ状態にあるそれらが共働因に] 依存 [して、中断し変化] するというのも矛盾するから。

ここでは、五つの感官の本性の無常性が、それらの結果である認識作用 (*vijñāna*) の無常性から推理されている。すなわち、我々の認識作用は常に起こっているわけではなく、或る時には起こるが或る時には起こらないというように断滅を繰り返す、また、或る時には鮮明になったり或る時には不鮮明になったりと絶えず変化している。そして、そのような認識作用は五つの感官を原因としている。それ

ゆえ、結果としての認識作用が無常であるので、その原因である五つの感官もまた無常であるということになる。ここでは、結果が無常であれば、その原因も無常でなくてはならない、という論理が働いている。

続いて、ダルマキールティは、五根と無表とを除いた色蘊、そして、受蘊、想蘊、行蘊、識蘊の無常性を同様の仕方で一纏めに論証する。

PVin 2 80,14-81,2: 同様の仕方で、諸対象（＝色蘊）、苦と楽（＝受蘊）、相の表象（＝想蘊）、欲等（＝行蘊）、そして、対象の認識（＝識蘊）が、生じては滅する、と必ず了解される。それゆえに「それらは」無常である。

ダルマキールティは五蘊の無常性の論証についてこれ以上の説明を与えていない。しかし、直前に見た議論から明らかなように、この論証の背景にあるのは、認識作用、つまり、心（*citta*）の無常性である。すなわち、ここでダルマキールティは、心の無常性を根拠に五蘊の無常性を論証している。まず、先に見たように、五蘊のうち、色蘊中の五根の無常性は、それらの結果である認識作用の無常性を根拠に推理される<sup>11)</sup>。そして、色蘊中の五境は心によって直接的に把握される、心の対象であり、そして、受蘊・想蘊・行蘊は、心に伴う心のはたらき、つまり心作用（*caitta*）であり、識蘊は認識作用そのものである。よって、このようにして、五蘊すべてが心に関連付けられ、心の無常性を根拠にして、その無常性が論証されるのである。

ダルマキールティは、以上の五蘊の無常性の論証を総括して以下のように結論付けている。

PVin 2 81,2-3: このような「無常性という」本性を有したそれら（＝五蘊）は、「それら」自身の原因（＝それらを生ぜしめている原因）の本性がそのような性質（＝無常なものを生ぜしめるという性質）をもっていることを実証しているので、そのような性質をもった「諸原因」から発生したその他の諸々のものにも、この本質（＝無常であるという本質）を負わせるのである。

すなわち、ダルマキールティによれば五蘊の無常性は以下のことを証明する。五蘊はすべて無常である。ゆえに、そのような五蘊を生ぜしめている、五蘊の諸原因は例外なくすべて、無常なものを生ぜしめる能力をもっている、と。それゆえに、そのような能力をもつ諸原因から生じたもの、つまり換言すれば、五蘊の範疇に含まれるもの、つまり作られたものはすべて無常であるということが証明される<sup>12)</sup>。そして、これにより、遍充関係が確定するのである。

かくして以上の第二回答においてダルマキールティは、先の前主張で問題とさ

## (92) ダルマキールティによる「諸行無常」の証明（酒 井）

れた、知覚されていない原因総体から生じる知覚されていない不滅なものを、肯定的随伴が示される対象領域から除外した上で、遍充関係が示されるべき領域である五蘊の無常性を、心と心作用の無常性から導出することによって、遍充関係を確定するのである。

## 4. 結語——第一回答と第二回答——

以上見てきた第二回答において明確なのは、ここでダルマキールティは純然たる仏教徒としての立場から遍充関係不確定の問題に対する回答を与えているということである。すなわち、五蘊説とは、有情が経験できるものの一切を以て現象世界の一切とするという、初期仏教以来の仏教の基本的な立場を如実に反映した世界観である。その範疇を超えたところのものに関して遍充を示すことはできない、というのが第二回答におけるダルマキールティの主張である。

一方、第一回答の核心である、目的実現能力の記述という考えは、結果論的には、刹那滅論証のスコープを仏教の伝統的な存在論の範疇から飛躍させるものとなったと言える。理論上は、どのようなものであれ言表されるものは、目的実現能力が記述されていることになるから、目的実現の継時性と同時性の概念により、その刹那滅性が証明できるからである<sup>13)</sup>。しかし、第一回答それ自体は、「知覚されない原因総体があり、それが不滅な本性をもつものを生み出す」という主張の矛盾を指摘するにとどまるものであり、遍充の証明には直接かかわらない。遍充の証明はあくまでも第二回答でなされているのである。この事実は、PVinにおいてSAはいわゆる *kṛtakatvānumāna* (*vināśitvānumāna*) の一部として登場し、その遍充関係を確定する役割を担う、というこれまでの理解<sup>14)</sup>に再考を促すものである。

しかし、ダルマキールティは以降の作品とされる *Hetubindu* と *Vādanyāya* において、この第二回答における遍充関係の証明を再説することはせず、第一回答に付随する議論で提示した、「存在性」と「刹那滅性」の遍充関係を確定する議論を、「[所証属性の] 対概念の領域に [論証因が起こることを] 否定する正しい認識」(*viparyaye bādhakam pramāṇam*) と名付け、前面に押し出すようになる。*Hetubindu* では、彼は所作性という論証因を用いない<sup>15)</sup>。仏教徒の存在論、世界観の内に留まることは、普遍的な論理学の体系を打ち立てることの妨げになると考えるようになったのであろうか。PVinにおける刹那滅論証の記述、特に第一回答におけるSAの位置と、第二回答の存在それ自体は、そういった新たな境地に入る前の

ダルマキールティの思想状況を良く示していると言えるだろう。

- 1) Yoshimizu 1999 が指摘するように、PVin 2 で叙述される SA の原型は既に PVSV 149,18–150,2 に登場する。PVSV での叙述と PVin 2 のその違いとしては、議論が登場する文脈の違い (cf. Yoshimizu 1999: 247) と、PVSV では、目的実現の継時性と同時性という概念が明瞭には述べられていないことが挙げられる。
- 2) ダルマキールティの著作順序は Frauwallner 1954 に従う。
- 3) 筆者は、2006 年より、ダルモッタラ註の梵文原典写本校訂プロジェクト（中国蔵学研究中心とオーストリア科学アカデミーの共同研究）に参加するという幸運に恵まれている。本論文はこのプロジェクトでの研究成果の一部である。
- 4) Cf. PVin 2 79,5–13. 付論の詳細については、Steinkellner 1979: 89–92, 150–151 (Anhang III), および McClintock 2010: 135–138 を参照。
- 5) Cf. PVin 2 80,1–8.
- 6) PVinT 2 Ms 91a4–5: *atha vā skandhā dhātava āyatanāni ca svabhāvo yasya, tasya kṛtakasyānityatvaṃ sādhyate. tenāyam adoṣaḥ, yad uktam—nanv idam apy aniśceyam* (cf. PVin 2 79,1) *iti*.
- 7) ジュニャーナシュリーバドラも同様の解釈を取る。PVinT (J): P260a3–4: *yañ na skye ba can ni byas pa yin pas byas pa thams cad mi rtag ces bya bar phuñ po dañ kham dañ skye mched tsam žig bsgrub par bya ba yin pa'i phyir | tshogs pa mtha' dag mthoñ ba la ltos so zhes bya ba'i skyon med de* | (= 或いは、[原因総体から] 生じたものは作られたものであるのだから、「一切の作られたものは無常である」というように、蘊・界・処の限りは論証される。それゆえに、「[原因] 総体を余すところなく見ることに關してである」、と言われている批難は当たらない。)
- 8) Cf. PVin 2, 29\*,30.
- 9) Cf. Steinkellner 1979: 94,7–9.
- 10) Cf. Steinkellner 1979: 94 (Anm. 338, 340).
- 11) 五根は、アビダルマ仏教以来、不可見なる物質とされている。ゆえに、その無常性は推理 (*anumāna*) されねばならない。
- 12) 五蘊の無常性の論証はこのようになされるが、無常証明の対象領域が十二処と十八界となる場合には、法処と法界に含まれる、恒常な三無為——虚空と択滅と非択滅——が問題となる。しかし、ダルマキールティは、法界と法処は三蘊、すなわち、受、想、行蘊に他ならないとし、五蘊の無常性と、十二処と十八界の無常性との間には矛盾はないとする。Cf. PVin 2 81,4–5: *dharmadhātuvāyatane 'pi skandhatrayasvabhāva eveti na virodhaḥ*. これを註釈してダルモッタラは、三無為は経量部の人たち (*sautrāntikāḥ*) によっては否定されており、また、暫定的にも認められていない、と述べている。ダルモッタラによれば、経量部によっては認められていない、ということが、三無為を法処、法界から除外する理由となっている。Cf. PVinT 2 Ms 93a3–6.
- 13) 例えばダルモッタラは、ダルマキールティの SA は、五蘊の範疇を超えたものが想定された際に要請される論証形式であると理解している。Cf. Sakai 2010: xxxvi. また、Hetubindu の註釈者アルチャタは、SA は、作られたものの刹那滅性のみならず、空間的時間的本質的に隔絶した (*deśakālasvabhāva-viprakṛṣṭa*) ものについても、その刹那滅性を論証できると理解している。Cf. 酒井 2009: 47–48.
- 14) Cf. Steinkellner 1968/69.
- 15) Cf. 酒井 2009: 52. 所作性という論証因の欠点については Yoshimizu 2011 において詳細に論じられている。

## (94) ダルマキールティによる「諸行無常」の証明 (酒 井)

〈文献と略号〉

**PVSV**: *The Pramāṇavārttikam of Dharmakīrti: The First Chapter with the Autocommentary, Text and Critical Notes*, Raniero Gnoli (ed.), Rome: Istituto italiano per il Medio ed Estremo Oriente, 1960. **PVin 2**: *Dharmakīrti's Pramāṇaviniścaya: Chapters 1 and 2*, Ernst Steinkellner (ed.), Beijing: China Tibetology Publishing House; Vienna: Austrian Academy of Sciences Press, 2007. **PVin 2<sub>i</sub>**: *Dharmakīrti's Pramāṇaviniścayaḥ, Zweites Kapitel: Svārthānumānam*, Teil 1, *Tibetischer Text und Sanskrittexte*, Ernst Steinkellner (ed.), Wien: Österreichische Akademie der Wissenschaften, 1973. **PVinT 2 Ms**: Sanskrit Manuscript of the second chapter of the *Pramāṇaviniścayaṭīkā* of Dharmottara (svārthānumāna): see PVin 2: Intro, xxx-xxxi. **PVinT<sub>i</sub>**: *Pramāṇaviniścayaṭīkā* (Dharmottara): P 5727, D 4227. **PVinT 2<sub>s</sub>**: *Pramāṇaviniścayaṭīkā* (Dharmottara): in Sakai 2010. **PVinT (J)**: *Pramāṇaviniścayaṭīkā* (Jñānaśrībhadrā): P 5728, D 4228. 櫻部 1975: 櫻部建『俱舍論の研究 界・根品』, 法蔵館。 酒井 2009: 酒井真道「アルチャタによるダルマキールティの刹那滅論証解釈——kṛtakatvānumāna と sattvānumāna——」, 『南都仏教』第 93 号, 38–62. Frauwallner 1954: Erich Frauwallner, “Die Reihenfolge und Entstehung der Werke Dharmakīrti's,” in *Erich Frauwallner Kleine Schriften*, Wiesbaden: Franz Steiner Verlag, 1982, 677–689. McClintock 2010: Sara L. McClintock, *Omniscience and the Rhetoric of Reason: Śāntarakṣita and Kamalaśīla on Rationality, Argumentation, & Religious Authority*, Boston: Wisdom Publications. Sakai 2010: Masamichi Sakai, *Dharmottaras Erklärung von Dharmakīrtis kṣaṇikatvānumāna (Pramāṇaviniścayaṭīkā zu Pramāṇaviniścaya 2 vv. 53–55 mit Prosa)*, Dissertation an der Universität Wien (<http://others.univie.ac.at/9623/>). Steinkellner 1968/69: Ernst Steinkellner, “Die Entwicklung des Kṣaṇikatvānumānam bei Dharmakīrti,” *Wiener Zeitschrift für die Kunde Süd- und Ost-Asiens* 12/13, 361–377. Steinkellner 1979: Ernst Steinkellner, *Dharmakīrti's Pramāṇaviniścayaḥ, Zweites Kapitel: Svārthānumānam*, Teil II, *Übersetzung und Anmerkungen*, Wien: Österreichische Akademie der Wissenschaften. Yoshimizu 1999: Chizuko Yoshimizu, “The Development of sattvānumāna in the Sautrāntika Tradition,” *Wiener Zeitschrift für die Kunde Südasiens* 43, 231–254. Yoshimizu 2011: Chizuko Yoshimizu, “What Makes All the Produced Impermanent? Proof of impermanence and theory of causality,” in *Religion and Logic in Buddhist Philosophical Analysis: Proceeding of the Fourth International Dharmakīrti Conference, Vienna, August 23–27, 2005*, Vienna: Österreichische Akademie der Wissenschaften 2011, 507–521.

〈キーワード〉 ダルマキールティ, Pramāṇaviniścaya, 諸行無常, 五蘊, 遍充  
(関西大学准教授, Dr.phil.)